



門入遠13
 號 2258
 卷 2

翻 譯 書
 倭 軍 書
 唐 軍 書
 隨 筆 物
 國々名所
 近世戦争書類

繪 本
 書 本
 滑稽物

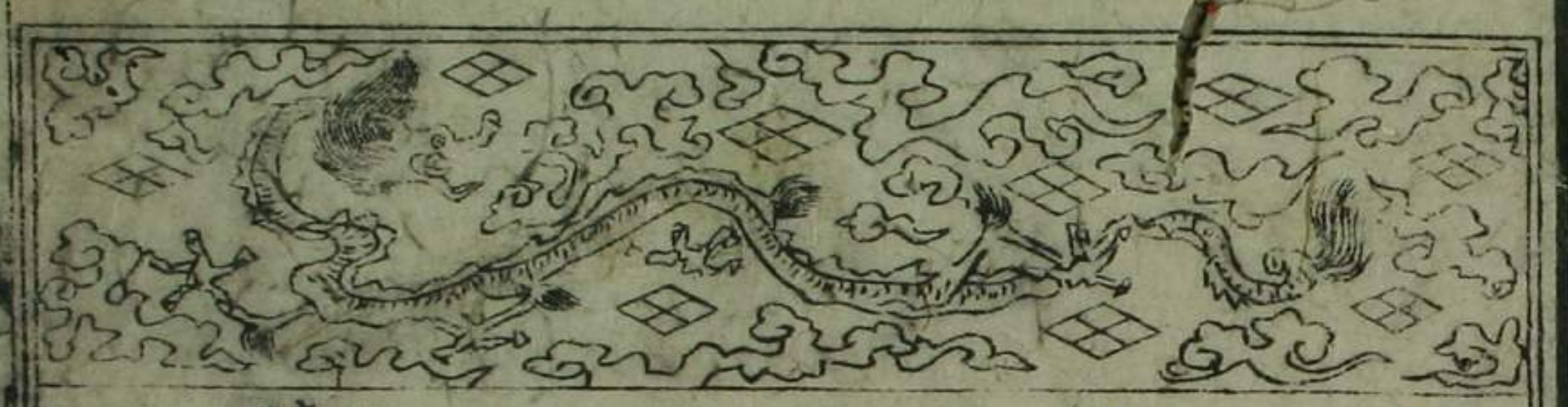
曲亭馬琴之作
 其外諸先生作
 軍書
 敵討
 諸家騷動
 御捌物

若く外數品は座比守法流之程奉懸也
 書物債主所
 誠光堂 池田屋法清

東京牛込細工所

池清

牛
 池清



繪本甲越軍記卷之二

目錄

信虎腰斬小澤半并穴殺替者幸

信虎斬小澤圖

信虎屠替者于壙圖

信虎手斬老臣圖

勝千代誕生圖

勝千代幼稚親明車并老狐計一休孫降車

勝千代勅學之圖



勝千八探愛花菓圖
 勝子代擊老狸圖
 勝子代雲中川牛産圖

繪本甲斐軍記卷之二

臣 信虎腰斬小澤幸井定教督者幸

忠信死せんと伯夷叔齊饑て死せし義士仁人と云ふも天竺の數
 免ゆ幸純と文王の丈聖なること美里七年の禍ひあり況や凡人小
 於てをや。爰も今井重之元定國と向山を斬る罪科小も萩原常
 陸が家に石がら忠良親練の後いよく信虎の心術に成る既小切
 腹小極る多田三弥を檢使やして萩原が方小下され切腹中腹一尺
 定國三弥小對ひ糸一時の過失ゆも君に敬愛せし由あり其罪を赦
 たる幸其罪重し小似れども人を殺す事難しき事なり其罪を赦す
 ば信重もなり君を怒る事ふも其罪一尺三寸中未一なる
 の危殆迫る小ありけし此言とありしや其後一尺三寸中未一なる

行者の服指を取あげ鳩尾の下へ突き刺し身と身を繋ぎしに後の方を覆ひ此
後及背骨の上へ小枝を刺しこも畏れ親なる親を埋し彼の方へ
俯伏し倒れ死したるも毛孔も通さず有伏するま由三味線原した小互
に歎惜するともども渠が最期も陰謀をせし事とも悔み顔も終ら
上せりけし小沢を以て承る空之元が殺るが方々顔もくさり一時
馬を下りて縁者の方小霧の居りしをまも小定國又切腹中流に
死せし時の度どもと聞ゆことら歎き悲しむを非しに小付ても彼の振
舞の情あれを恨み今と申すは事なきも結果倒れし小沢の心かこ
みふと假令定國重た罪もせよわが小沢と一回も死罪を宥免
らざる小沢殺し罪は行きたし事の遠恨さしつらめらるる道の君小
はさる事未だのこりけし斯く其日より一同さふりし所を

私例

いかに歎き小沢もその信虎と孫を即ち吐きおけし想言を聞けし
性急なれば小沢も近習小沢の心かこみたる元定國を殺しし國政小沢
せざる事法の法より定國の罪責を自己の罪にあはせしむると云ひの
どもも渠が孺子溺く十六七歳と異他國へ走る才なきべしとも
ぞとぞ宗とる小沢が心かこみたる元定國を殺しし國政小沢
撃つて事なき討たざれば有わつて下知の間も信虎の性急なると知れし
阿波連習六七人小沢が毒なる所小野付時こぼれ捕へ来り信虎協同
小在り下知し風姿妍雅少く荒くせば後りやまきこ福射取くする
手小を小纏しめ其縛りたる繩を以て木裁の樹木の枝を為上りし時
空小向ひ枝上るをより骨節一同小寫り両脚地をいられ龍色変て
葉の如く息遣ひし若くげある小定國を際際しくおも思

甲
草

好

阿波連習六七人小沢が毒なる所小野付時こぼれ捕へ来り信虎協同

手もあはく彼の顔を見せし見せし信虎公平來の清晴今ハ身
の離れ成りぬれ其意を承り唯今黄泉路の先づけし事
去かかひまう小悪事増長ゆりくおん家と失ひぬ事君が代も七
ど。代もよもまう恨の言清耳も徹し能えぬと若しこの中
けぞよとて

信虎聞てわろくとお笑ひあは女日より腰折せ終とて附くと面白く
ぬまげり言宣しく思ひに唯今白刃頭も望む附健氣も後
くる物もは終の下信千尋のすけは遠くもやも中極一の恨の種へ
も其事とふ小悪事終ゆ行の雪小降る事終と折るが折る武田の
も折る人の事と折る武田を誹るる風信是武を聖言を言ふは

かたわらるまじも公膳の丈まらる事勇子も及むぬわまは一合公助け
ゆきんは一恩を思ひは折るて我世のわく業もまらる公祝言小孫
おせせとて平れらるえ本信虎暴悪怒らる人介ととも物忌ひと
癖あり今小沢が武田の折もたてたれ申成録したるがわやのやん
真顔も成り見せらる行腹のたまもまらる小沢若しこつとて
ごの声も意とて

目を悪く難やいひとひてしもよのた業うらめをこせ見えぬ
や強られた信虎頭を傾も申とて考て終の意とめどいひと
のうに業の園とらふまもまらる板と夜言らると思ひたわ小令じ小沢が縛を
ゆるさんとさる討て井孫を渡らるとまの信虎本向ひ是と取初の終も
一と悪く思ふた終あり其意とひり其王またと越王句破と合

甲

會之日...



信虎合屠
 警者于塘

...



越王秋の敗兵國の擄と既小兵國小を辱を受かす二年。吳王
 糞まてと實く其敗兵王と勾踐を率國小還しぬ越王歸坐の乃河も
 して吳王を滅し社辱を雪んと思ひ范蠡小計に吳王を忘る人
 為西施といふ美女を送りぬ吳王西施を納んとする時伍子胥側小在る
 君の必に受ぬ事ふは是越王君の意に其備ふたを政令とるん
 あつと頻々諫言と付とすも終小國と西施をらぬ姑種墓とす
 を造り益疾燕樂し果して國政を廢る伍子胥を諫る吳王友
 しく吳王用ひ方のかん怒り伍子胥小死を賜ふは時子胥吳王
 が使者の兼て首級切んとする時左右小向ひて死せむ之を
 して越王は國を亡くし後等扶目を叙く城の東門の上小樹を國を
 亡ふを見んと云く自負死せむ死せむ越の國を呉も東の國

たつふよと越國の大軍兵を亡くし呉城の東門より攻めんとす
 目を東門に掛おせり果して子胥を言の取く之を死して越王兵
 國を亡し吳王の言殿金く兼て京と成まら今は秋の目を叙る難
 や何方せむか子胥の子胥が故事なりと孫也なる秋也吳王の東
 門より亡びぬとば國を何まの爲小滅されぬ人も知まらぬと
 目を掛る事も何まの難に於てしも終んとも事なり死小わぬ
 葉つる跡ももんんとすも遠く其の悲名もつるは秋の亡ひ
 子胥の死も事なりはしも吳王の彼れ孫も事なり京とありて
 其の事生ひぬと後く葉つる事あるは子胥が東門に掛んとす
 に佛とい我も孫小目かみて見るとの意ありて孫小葉六信虎
 怒り庭前に懸りてを秘藏して時の間もも事なり備前長光の言

唐書卷一百一十五

思

物故子も見せしむ今此悪言思ひ知らん是思ふや走るる利刀の光電の如く
やくがやく腰より丁也切りおろる力量と云業物さるる水瓜切らるるも是
西陵と敵頭の重さ小履履き真例ある本を知ら宙を首を打落た
撞亮朝の露と化し夕を清く消えたり小沢死れ味く三代の遺言と云
一夏ありし遠く信虎の孫勝頼の時小沢あり名家忍ち小亡ひあはしせ
不思慮も是猶も一婦恨を抱く討た六月霜を降せし是等此夏をや
中とく是より國中は士民信虎の亦死れ恐るる事りけは其後信
虎曰ひはるる玉中に在る有用の者も音もあつこれが世に世上の事と云
士の費悉く捕もさるる下知のりよ恥ふ夏も秋ても主の意も願ひ
君寵を蒙ると謀り可使の嬖臣や四方走り去る時を極る音も二十人
とる連も城外外とるる穴を掘り音も等と二月小沢入るる埋殺した

せらまらる是を見聞はるるあま今来者有の悪人かと彈指して
憎むらわむし一奉の始皇天下取め一順橋者日く小婿長し人民
苛政も若しとく儒臣悉く諫表を奉るる小始皇とく小怒り今
天下の内聖人の書在るる極小吉例を奉り信言もおせまると懸捨
儒者を埋殺せしとて儒書焚燒棄儒者殺百人を尤も今令言せし
せよとされし其を諫入るるを怒りて殺りし今信虎の音人を殺れ
し只強忍と好むと潤るる耳とをあるもの許しなりぬも工謀下徳
ち内藤相摸るる兩人とるる小今并り平に然直諫せんせしかく通
て目通を迫退せし其後と一及も對殺せられしとく小主人
の終状とあるて是より新くい富家滅亡の期通るるありと兩人
喜小あり今日忙しく城中に駐陣阿流と云取決の女房と云くや

甲越



信虎憤諫言
手討老臣

九

信虎憤諫言
手討老臣



信虎憤諫言
手討老臣

九

入るるは及信別村上友俊門尉義清小長時兩家思ひや、小
 吉園の百姓公能小吉小農氏も彼案に同い、既小軍運
 郷民九二万人むら、並奇に相集り所能(攻家)と調書はるう、又
 家の旗先も、差々系、色、お見、由、註、進、行、ま、小、統、も、小、言、上、は、る
 子細有く、ま、上、下、の、げ、腹、中、上、下、れ、や、中、地、阿、統、を、驚、さ、興、へ、進
 入、折、言、信、虎、前、夜、の、酒、宴、ぬ、沈、醉、し、折、後、不、元、小、度、入、り、松、奔、に、是、の
 揺、寤、し、兩、士、言、上、の、旨、如、く、や、中、れ、を、忽、ら、寝、林、を、飛、起、復、子、に、等、と
 ぞ、阿、統、小、長、老、の、大、服、指、を、ぞ、持、せ、目、瓜、擗、廣、間、も、走、り、然、し、兩、人
 村、上、小、吉、系、が、押、寄、たり、や、九、其、勢、何、復、あ、り、や、兩、人、む、ろ、く、頭、を、受、小
 指、付、の、や、茲、後、發、る、る、も、人、の、後、も、あ、り、一、發、槍、起、は、り、し、中、の、臣、等、の、備
 言、や、く、入、り、世、に、騷、動、の、氣、を、傳、へ、我、れ、兼、て、涉、渡、し、上、り、ん、た、れ、も、

構

赤小諷諫、後、當、て、傳、聞、と、清、免、お、れ、れ、を、手、腹、を、お、も、
 一、つ、清、前、(孫、也、ん、の、這、極、の、虚、計、を、案、し、知、し、清、推、系、は、る、昔、年
 山、縣、河、内、中、馬、湯、屋、夏、也、諷、死、は、り、其、後、亦、も、今、日、ま、で、空、く、存、命、は、
 幸、實、に、兩、士、が、忠、心、不、慚、慨、は、ま、り、然、れ、も、自、然、兩、人、が、忠、死、を、思、出、さ、れ、
 聊、也、て、清、の、状、む、い、復、で、お、り、懊、悔、の、氣、色、も、は、り、や、ん、と、相、
 考、へ、二、ツ、月、の、面、に、諷、死、は、り、て、後、君、の、清、之、幸、起、ん、た、難、あ、り、ぬ、の、清、お、
 忠、を、盡、さ、し、の、實、さ、や、や、老、角、の、思、惟、小、年、月、を、過、し、今、日、ま、で、存、命、
 仕、り、清、の、状、を、伺、い、な、る、不、思、行、目、く、小、募、せ、の、心、を、清、家、の、願、を、さ、
 時、き、別、案、と、相、い、ふ、清、の、松、願、を、唯、今、の、如、く、詐、計、を、白、し、清、家、を、驚、
 一、ま、る、熱、世、の、亡、づ、る、根、本、と、考、へ、り、四、民、業、を、安、ん、だ、る、更、に、は、ら、
 之、の、上、に、跡、を、去、さ、れ、る、和、漢、も、亡、國、の、端、ら、り、今、井、坐、く、元、を、救、

甲越

敵を劬たる忠臣とて非命に死を賜ふ其集尤所羨と多かり罪
 とをせしむる死罪に處せしむるは科小の法に依りて其子孫を即ち清君に
 有らば處是をも罪と作せしむるに依りて一國信明へ出奔はりて
 家の怨敵たる村上義清は身を寓して在るに於ては方々放るる一方を
 清用にも乏せられたるに一人を死刑に處せしむる一人を出奔はりて其
 方々走りて味方ありて二人の勇士を減し敵一人の勇士を加ふる計を以て
 三人の敵を討つるに依りて其のあひはれを即ち年知ふしやせども其
 十五以上も存成りて清南家弓矢の格を以て能く其の安南に若く
 け者越小加りては數百人の怨敵を掃蕩せしむる君と徒清邊臣さるるに
 國民の幸が我慄として所を武威に伏したるのこゝ敵四方に滿つるに
 怒り小豆を以て用ひて石とせしむる唯我の恐れ從ふしとて其の實に

三か難き背く兵ありけり。隣國の内仁智は將也舟り國民と懐く
 とれを彼流悦んぞ故に内通し他國の將帥と導く。其時味方兵忠と
 是と者かく我を以て示し敗散はり。清先祖より相傳はり清家系君の
 代りあり断絶はら幸目前の義あり。不詮國家敗類。群臣受命落仕
 を見んよりの速し諫死はり泉下は君小仕をくんと一歩の上伺公仕臣
 等がや不る言と思ひ百とる。近士二人も刀取作付され我ら首を
 加られ下されよ。思ひ今凍るる殊も忠義の士はわを来りたりあり
 物狂の兩人が一駁や許し寝耳とせり。且小計の諫言を聞て憤怒
 の烈火も仲瓜潰るるごとく。兩眼濁し見張面白く。練言して齊聲に
 一殊文國家滅亡の附言をせり。不吉を侍りて一言一發の聲起
 一編計をものく主を驚を曲者奴等。近知ともくまんと用ひるまでも



勝千代君
誕生圖



糸女申越書卷三

なく予が手紙中し今生の服をさすは危し其處動ふと云ふ耳く
例の長光二尺を守工殿下總守が真頼(雷の聲)切替る暴悪
の人と(新)も武州久母迄まてる名譽の早業一刀此下肉と云ふ頭三小
劈割る内殿相模も(新)も迫着自刃と奪入と云思ひん身と云ふ
進(新)も道(新)の園君いふ性新たりとも(新)自を分らぬと叫ぶ
右の腕首打落し(新)を刀小左の肩に胸板まで切つけらる智と云ふ男と
いふ(新)も(新)も金(新)忠臣と(新)も老(新)の(新)痛手と云ふ進退を(新)や(新)
さう(新)身(新)を(新)覆(新)し(新)倒(新)る(新)所(新)其(新)後(新)と(新)め(新)と(新)刺(新)さ(新)る(新)暴(新)悪(新)の(新)仕(新)り(新)方(新)
是非も(新)さ(新)き(新)是(新)より(新)後(新)と(新)ま(新)ひ(新)小(新)身(新)を(新)顧(新)と(新)譜(新)代(新)重(新)見(新)の(新)士(新)と(新)も(新)云(新)
と(新)して(新)流(新)る(新)者(新)も(新)悪(新)事(新)目(新)と(新)も(新)増(新)長(新)し(新)が(新)い(新)は(新)く(新)も(新)な(新)ま(新)し(新)め(新)もの(新)
此(新)を(新)あ(新)り(新)取(新)り(新)て(新)遊(新)ぶ(新)者(新)も(新)遊(新)ぶ(新)者(新)と(新)い(新)ふ(新)ら(新)ん(新)だ(新)

勝千代幼稚聰明

老狐計三休禪師事

司馬温公が勸學歌の養子不教父之過也云々後進ども父無道は
て訓導者云々さふ(新)れ(新)如(新)何(新)せん(新)夫(新)人(新)と(新)天(新)地(新)の(新)性(新)本(新)分(新)の(新)稟(新)さ(新)る(新)不(新)あ(新)り(新)
瞽瞍(新)の(新)子(新)に(新)舜(新)の(新)如(新)し(新)た(新)聖(新)あり(新)武(新)田(新)小(新)左(新)又(新)然(新)と(新)云(新)ふ(新)武(新)田(新)勝
千代(新)と(新)云(新)ふ(新)信(新)虎(新)朝(新)臣(新)の(新)長(新)男(新)そ(新)の(新)母(新)穴(新)山(新)左(新)衛(新)門(新)大(新)丈(新)信(新)孝(新)の(新)女(新)と(新)云(新)ふ(新)ら
伊豆(新)守(新)信(新)行(新)の(新)妹(新)と(新)云(新)ふ(新)穴(新)山(新)氏(新)と(新)云(新)ふ(新)武(新)田(新)の(新)一(新)族(新)本(新)は(新)山(新)家(新)と(新)稱(新)せ(新)り(新)
とも(新)進(新)代(新)家(新)風(新)零(新)落(新)し(新)信(新)虎(新)の(新)父(新)信(新)昌(新)の(新)時(新)より(新)南(新)家(新)の(新)家(新)士(新)と(新)い(新)ふ(新)ま(新)り(新)
抄(新)る(新)小(新)勝(新)千(新)代(新)九(新)出(新)生(新)と(新)云(新)ふ(新)い(新)は(新)大(新)永(新)元(新)年(新)辛(新)巳(新)の(新)歲(新)三(新)月(新)其(新)頃(新)駿(新)河
國(新)の(新)住(新)人(新)櫛(新)間(新)玄(新)蕃(新)元(新)と(新)云(新)者(新)あり(新)今(新)川(新)我(新)元(新)の(新)所(新)は(新)小(新)左(新)左(新)の(新)地(新)を(新)奪
つれ(新)信(新)列(新)飯(新)田(新)と(新)云(新)所(新)は(新)小(新)左(新)左(新)と(新)云(新)者(新)あり(新)小(新)左(新)左(新)を(新)驅(新)遣(新)し(新)一(新)騎(新)を(新)起(新)せ(新)し(新)に
より(新)信(新)列(新)飯(新)田(新)と(新)云(新)所(新)は(新)小(新)左(新)左(新)と(新)云(新)者(新)あり(新)信(新)虎(新)國(新)一(新)百(新)と(新)云(新)者(新)あり(新)時(新)日(新)を(新)殺(新)さん(新)押(新)よ(新)せ

さら破るべし甲鍬孤出馬をひひ一戦の下に一騎の口氏を切腹之節
 同成も打亡用。三月廿八日甲府小凱陣はく其日信虎の内室平の
 男子と産め勝軍して歸り日生れをむとて幼名を勝千代と号
 のひぬされと我國兵家の祖とも稱せられたる産めの特の英勇なる故
 也。降誕ゆへに時種々の不思議とも多かりし中にも人様小児て登
 一産家れ上小自雲一條をかざれ下は信目よるる時を唯自旗
 の風小翻ふごとく見せし小精志むが程空本をぬり四方へ散失する
 時一隻の白鷹何方より来たるともなく産家の上より三月廿で其
 を去り是を見せし毎日は徒莫小ありに尚家宗の諏訪の神
 の神使若君を守護しぬふるや未幾へく思ひたる七日の祝詞
 終りて後武田家のく若君の御眞をたると小其状魁偉なりて若君の

棟

雄

小児と異り何ある幸ありて。相小唄あり若君小はね支ありて啼
 のふとれと声大れめて人の耳をせたり。理かるるか後小法性院殿信玄公
 とも是より乳母博士日公重ひて書ひなり。幸と積て成長ゆくと
 幸八歳に成ぬ時を若君と教ふると其頃圓山派の徑宗長持寺の和
 尚かゝりの能書書の聞へ育て彼宗小到りせぬ。和尙小法性院殿信玄公
 のふ小法性院殿天竺の妙備と氣韻てび落し六弦蛇の勢ひを摸。書
 籍など讀むはいつと所小一度教ふてせていつび忘れぬ。和尙も奇
 吳の思ひをふ。或時庭訓雜書とてそののと取出し是は小國玄惠法
 印の心その著る書なり。君讀まぬとやせ小僅三日ありて是ぬ
 一の心味ぬとらりぬひ。也。是と南村礼史の意勢とるぬ。也。也。
 頼く兵を用ひ國を治る使ともなりとて書あは諭ぬとて言ふあり。

會入日 戊辰 三月廿八日



勝千代
勤學



終之日走言卷二

和尚七書を取らば、教書も七書あり、輔二田孫子、兵子、司馬、法、尉、僚、子、唐
 太宗、同、對、等、の、七、部、の、兵、書、以、て、五、事、七、計、攻、城、野、戰、一、つ、て、備、を、し
 つ、事、か、し、若、君、一、つ、び、讀、で、雀、躍、し、是、を、我、の、言、ひ、と、し、居、む、と、さ、然、し
 と、宣、後、を、書、り、あ、く、讀、を、る、あ、ひ、と、あ、り、又、九、歲、に、あ、せ、め、二、月、の、夏
 也、あ、り、近、臣、も、折、り、青、麦、の、中、に、雲、雀、の、窠、以、作、る、附、を、ら、い、ま、也、
 窠、と、探、り、て、雲、雀、の、子、と、さ、る、べ、し、勝、千、代、君、の、弟、依、り、斯、く、雀、井、小、出
 々、小、出、も、孫、生、の、最、初、と、い、ま、麦、穂、を、食、む、と、て、公、と、め、め、と、雲、井、小
 界、を、雲、雀、の、聲、雲、漢、の、上、に、穿、ら、れ、近、習、の、壯、士、佛、伽、の、小、童、麦、回、の、中、に、馳
 入、其、處、よ、は、ま、よ、や、雲、雀、の、窠、を、押、お、り、と、い、ま、近、臣、何、と、も、二、つ、を、探
 せ、所、も、あ、り、又、と、一、つ、も、取、ら、ぬ、ご、も、ま、り、り、れ、勝、千、代、君、と、や、附、の、間、に、
 窠、を、り、何、の、子、も、な、く、獲、ら、ぬ、が、た、か、く、心、思、儀、の、変、ら、ぬ、あ、り、と、さ、る、

終、日、君、と、は、ト、窠、以、求、め、取、ら、ぬ、者、多、く、た、ま、く、取、ら、ぬ、者、も、二、つ、
 ぬ、に、後、ら、不、若、君、と、附、の、間、に、窠、を、り、ら、ぬ、と、さ、る、幸、甚、不、思、議、小
 雀、も、と、し、を、若、君、覺、お、し、後、ひ、の、ひ、我、等、と、思、ふ、れ、九、を、黙、の、聲、ひ、の、
 窠、を、か、は、ら、ぬ、根、を、と、り、又、と、一、つ、も、取、ら、ぬ、者、あ、る、の、の、空、を、り、り、る、也、
 人の、色、を、若、君、を、見、し、其、窠、と、探、り、取、ら、ぬ、事、と、思、は、れ、恐、也、遠、く、地、に、あ、り、
 其、後、麦、の、中、に、潜、り、あ、り、て、已、が、窠、得、ら、ぬ、が、れ、也、其、子、の、食、を、と、り、後、を、
 再、び、餌、を、取、ら、ぬ、と、思、ふ、と、公、の、せ、く、ち、に、窠、の、を、り、直、に、起、上、り、幸、
 也、あ、り、と、不、圖、を、付、ら、ぬ、に、よ、り、我、の、雲、雀、の、舞、下、は、地、を、何、と、さ、
 飛、上、る、を、何、の、其、地、へ、あ、り、探、り、と、ら、ぬ、事、と、其、意、を、ぬ、窠、あ、り、と、さ、る、
 幸、く、取、ら、ぬ、と、り、と、さ、る、と、い、ま、近、臣、あ、り、と、若、君、の、聡、明、な、る、と、感、た、る、天、文
 元、年、其、既、ぬ、十、二、歲、に、成、ぬ、其、年、八、月、中、旬、の、幸、な、り、と、さ、る、日



勝千代
採雲雀巢
於麥隙



終之日 走言言卷一

文書付折しも側侍のりなく寂寞として上物を何うもふふと
出る月のしるり打露り何とぞん越るの真も思ひ出らるる若君
何心か庭前をふり車も年輪も幼かや常にも常にも馬と連
磨のいふ毎朝もいふ馬も其後と射術射術と曰くお統言古
はかせを廣庭の向ふと射場を極小引流く本馬も交されり
極小引の本馬忽ち身振ひて身をせりやふといふ小勝千代の劍
術と軍法といふ何とぞ妙なりやや君少も怒るれば去妙一致何と
も妙なり是劍術の妙ぞと云う疾く躍り小本馬の衣も脱りり小本
睡と抜打小本馬の頭と劈りて極小引も其後更も言もせん
け幸近臣等にも語りぬらん去きたる神小復新もく体もふい
お今朝もより掃除のトお花裁の極小引の中極小引の右裡侍中のを

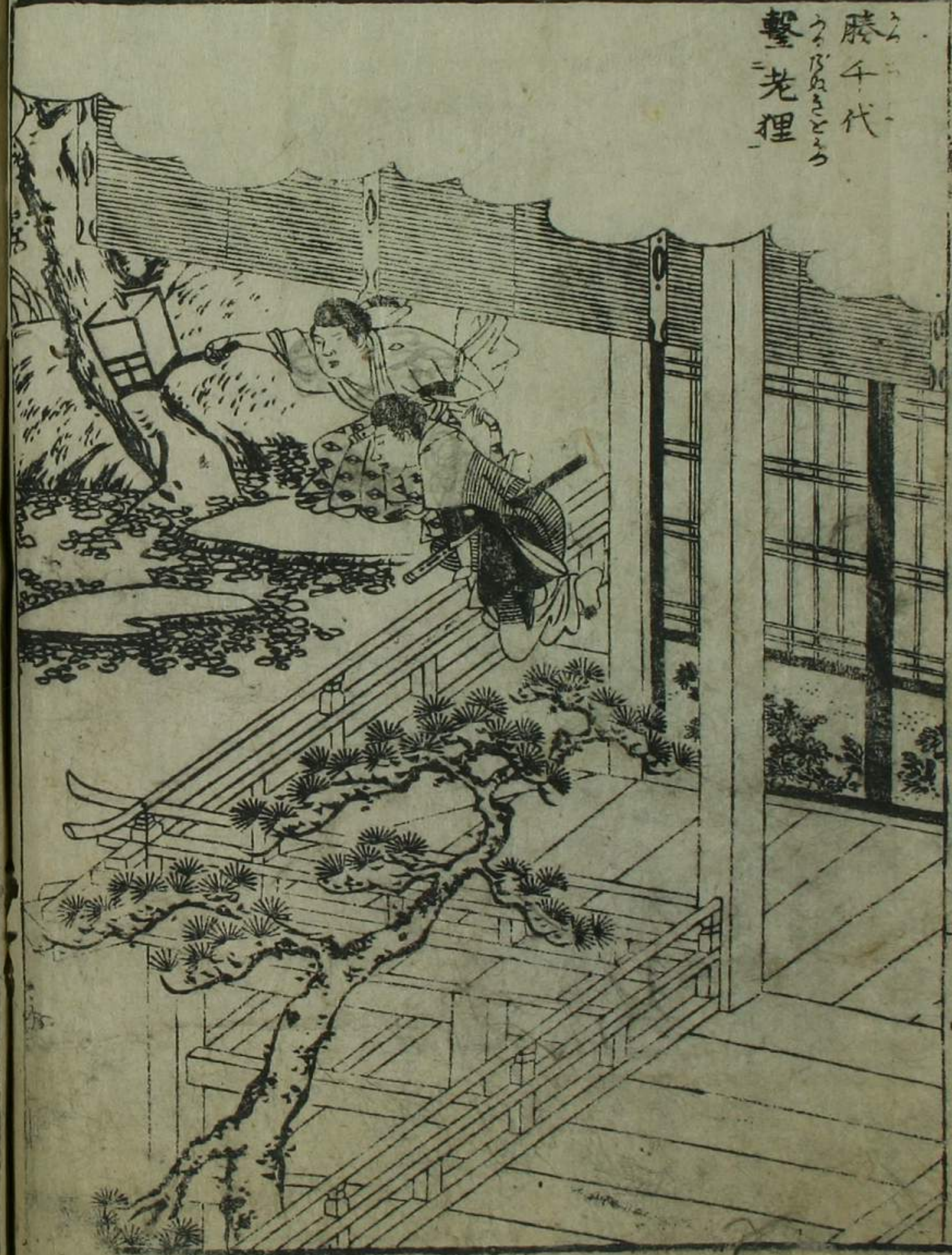
ところへ抜るるもさるる小切も死したふと見付申の極小引何者
の切るるやとぬくも騒ぎ言る公聞一は極小引一定吐快の不思議もは
右裡の極小引なりぬと思へ右ありと極小引も極小引の言状がも中出
るぬいりしと若君當此小引なりやば鳴乎もく云言るる極小引
天下に武名を羨しぬ人々も天性凡人も是らりと後世の語りけり
是と極小引天狗の顔の人むをさる一試んとも極小引は極小引の人
も障得せし勝て大膽なる又武術の達人も智術道氣千方小引
まさるる人本わきまに試んてむく京師紫野の辺も千歳を結ぶ
極小引も或時人本馬く物語も我大徳寺の一体極小引道も
まされぬも何れもして附胎も心と思ひぬるも極小引も極小引
禪師道功世も極小引公志もくも極小引も丹國小引も極小引

端小ぬる満て志充滿して附さふか。其く狐狸の人ぬ附て志一
 轉動する耐手足の丸の回より皮肉の回へ変かつて志一身ぬ通く轉
 動する人ぬ附て社に然もとも折をひく其を奪ひ附てんその社と
 日小唐室の内小漣洞と何小唐小禪師常に洞蕭と好く雨暇なる
 耐と吹ぬ是を座竟の便よと思ひ巴が友瓶の中に入りて此者の有
 一派尺八の筒の中へ入りて禪師の洞蕭を吹んとくぬり重ぬありて
 其の如く吹うじりする事なるれ其耐禪師こといふ小と吹口の方より
 貪り宿する支あん其隙ぬぬく足の丸より附てんせぬ一合せ何小
 下は禪師一日空書耐禪室の裏中在り例の吹管を取出し吹んとん
 扱こそと思ひごと禪師の膝下にありて何れも友と筒の裏中潜し合
 居たりぬ禪師何れなく管は小唐室を吹んとせぬれぬる小志せし

一六禪師何れ物有て志と復さ変を何れ其何れ尺八の吹管
 を送りて尻の支はをよ火吹行て火を吹ぬ強く放し吹ぬ
 するに我友瓶尻の方より禪師の豪息ふ吹出され巴が座なるあり吹
 持されぬぬ巴も禪師の紅智小鷲我友と我思ひあこところ
 と吹出され一鷲を吹ひ其後二十日をころへ頼ひぬぬも友も禪師
 打れた上智のくると志き極なるぬくと悟りたるは話の虚実と然れ
 とも心持ふ耐の間も髪を入る支社に狐狸も感さ事なり
 名。扱十三歳よ成りふると二月の末鷹道遠して一ツの沢をふらふ
 教書の水も沢水小川の群遊びると志を教ら捕さんとしぬ下も水
 鳥をぬぬ捕まん夏を思ればぬぬま下へん意の諸鳥と捕る
 ぬぬの穴地小なるりの或る水中に居る所を捕ると又鷹降が鷹を



藤千代
 うぶぬきとら
 撃老狸



終之田志宣言卷二

十九

田

今と小も地と誰と死（所）と今も尋常なる是も後と水も人
 今と死（所）の死を聞と及く水中に集り根も亦た後と小迫り
 今と死（所）の浮島も礫石を打てまるとまるとけ所（所）に多く環濃くあり
 今と死（所）の礫石を打てまるとまるとけ所（所）に多く環濃くあり
 人幸と顔とあつく礫石を打てまるとまるとけ所（所）に多く環濃くあり
 なる田の中も民家も六軒あり飛鳥も小家の内も田畠の野ありとぞ
 求も下知りあり近習難人を遠走り小家の裏もやうありとぞ
 物も中春十日あり田畠と家毎も拾ひたり農民ももや
 されば毎小色と求光来る所も田畠の山を築とるそれ其貝
 礫石打て目へも作小春も諸士の面も水鳥を目南散く目打生ん水も
 今も水面も堪るねえ上も水もひく小鷹と放り多し積物とほり

田

今と死（所）の死を聞と及く水中に集り根も亦た後と小迫り
 今と死（所）の浮島も礫石を打てまるとまるとけ所（所）に多く環濃くあり
 今と死（所）の礫石を打てまるとまるとけ所（所）に多く環濃くあり
 人幸と顔とあつく礫石を打てまるとまるとけ所（所）に多く環濃くあり
 なる田の中も民家も六軒あり飛鳥も小家の内も田畠の野ありとぞ
 求も下知りあり近習難人を遠走り小家の裏もやうありとぞ
 物も中春十日あり田畠と家毎も拾ひたり農民ももや
 されば毎小色と求光来る所も田畠の山を築とるそれ其貝
 礫石打て目へも作小春も諸士の面も水鳥を目南散く目打生ん水も
 今も水面も堪るねえ上も水もひく小鷹と放り多し積物とほり

乃命高日子彥... 是より後之... 田原見付... 庭へを思ふ... 乃命高日子彥... 是より後之... 田原見付... 庭へを思ふ... 乃命高日子彥... 是より後之... 田原見付... 庭へを思ふ...



乃命高日子彥... 乃命高日子彥... 乃命高日子彥... 乃命高日子彥... 乃命高日子彥... 乃命高日子彥... 乃命高日子彥... 乃命高日子彥... 乃命高日子彥... 乃命高日子彥...

たは
一單行

依

傷つとるなりや恩ひが其弊もてと相傳もるなりと其腹之の事
 色もて傍若無人の事なりといふも敢て色もせざる退却し
 志因家本室室しとる物にありや一丈長の旗才二匹揃て三
 柄旗法性梵才四左文字大小の太刀是るか徳家おぼせ品なり
 よし勝千代丸の買ひた更とせらる消極小なり二即丸の悪
 垂ても能く極小と更をた右小とせて逆さひめたり調書と云り
 のふぞ是非もるんたふ小儀入道日降と云者あり則小儀と云る虎盛
 ぐ父なり弓器の藝もたふに南家第一の加織と称せられ勝千代丸の傳
 士として襖褌の同とを頼りま育一なりが熱信虎の不行物狂しく語
 巨を殺害し近末と頼小家徳と徳と竊小瘡去せんとの密計ある更を
 排しと南家のちせとる南家廢滅の期迫り小あり後れを南家
 せざる謀計をたんとし忠臣の死傷小ありいと感極勝千代君小

同

叫き



乃ハ扱も沛彼の仍状縦逸反くも増長よりと斯てと南家危急存
 亡の秋より東より春巴和尙の物語小ありは若齊襄公と云人あり
 暴悪憎慢めして忠臣の諫を容れ襄公小妹あり名を文姜と云乃ら
 魯國の桓公も嫁せり或は桓公文姜を侍ひ母小あり襄公文姜
 が宮内失ふるに意慕り宮小桓公と殺し文姜公奔るも人と云ひ
 一日桓公と謀りて味介へ將小出せり襄公の是が子彭生小令と
 汝明日將場もた計て桓公を射殺せりといふ彭生父の言も
 ばひ若萌の中ら竄れ忽ら桓公と射殺せり襄公聞小悦び文姜を
 齊小とて終小人偏の法も遠ひ妹を収養し其後悪事の洩れ
 を忌む彭生小も殺せり又もたて齊の程は襄公の無道ありては
 害し妹小たると見え内公小誰せやありは則襄公が家也官

曾天日 戦軍 記 卷之二十一

七三

甲越

69

繪本日遊記卷一

七〇



合

勝千代
雲中
到牛
崖

繪本日遊記卷一

十三



仲鮑叔牙といふ両人の忠臣ありて是も小思ひなり是亡國の端なり我
と周の基業を起したる太公望の末葉裏に他令も通めりてさるる
連綿するも家断絶すべし

アリヤマ
倉収、か
義公に比するは、猶餘り精り、
其くは、滅ぼされ

當時隣國に大敵ありは、
其に在りて共に之を

終せん事必すなり、
其に在りて共に之を

更なりは、
其に在りて共に之を

終せん事必すなり、
其に在りて共に之を
其國の真慮を考ふるは、
其に在りて共に之を



有るの裏公比と居るも、
其に在りて共に之を
其國の真慮を考ふるは、
其に在りて共に之を



其國の真慮を考ふるは、
其に在りて共に之を

仲鮑叔牙といふ西へ忠臣ありて是亡國の端なり我
周の基業を起したる太公望の末裔襄公他令で通めりて亡る
連綿する名家断絶せん我遺恨ありて是亡國の端なり我
白くはるしやく思惟し襄公二人の子ありて兄を糾といひ弟を小白
といふ年ありて幼かりし鮑叔牙と糾を後ひ管仲と小白を後去
其下公と襄公たふ他人のお國を奪うたその子孫中を幸國を後
家名を再真せんとの心あり果して襄公暴悪止まりて一族公孫
和が殺され國を奪はれし時小白と管仲といふ國を生て成長し
管仲と幸國を立候て終小孫の國を治る桓公是より中よりあり
熱國の眞履を考ふる小國ありて是時と管仲鮑叔牙を如く忠臣
ありても諫を用ひしれども其時とて是を討ち小如かりし今館の

△

有るの襄公比と居りも如く之晉の隣國也大故ありて
滅されしとて是時とて是を討ち小如かりし今館の
奔りたりし素渚の如く是二子ありて今に在りては二即成と成
督せんとの調義ありて自然君小毒害する人企ありて計あり
其難を避る小理ありて二子の信虎を他國のお小滅せんのみまはれ
て尚家再真の義兵を起し一の小理ありて是より好布ありて
水も授うらんがやとありて勝千代君涙を流し海が中を遊給の理と
こころありて父の亡りと信人更不孝是より大なるありしはと父
我を憐れむと國を去る事ありて父の命を安むる道理と海我をい何との地
連なりと思ふと日津が回今三列牛窓とて地小の如くありて
ありて素渚の如く士生て眼流とて小孫とて和漢の兵書も眼く

△

嵐

こと富の人の徳と... 忠義の心... 軍法... 勝千代君も... 及べり... 士月... 乃人... 小... 乃...

池清

傳

大岡 天一坊一代記 四十

三考 誠忠 義士夜討實録 廿六

漆崎延房編 繪本難波戦記 全十五

政談 村井實録 五十

忠誠 義士銘々傳 百三十

柳亭種彦編 義士銘々畫傳 編

大岡 遠見録 二十

前田先生編 復信深山櫻 四十六

開明 高橋阿傳實録 五十

近世 上野戦争實録 廿五

兩國 女武勇傳 四十

通俗軍書 人情本寫本 新古今抄別

一 古本... 宣... 貸... 被...

東京牛込區細工町十六番地 誠光堂 池田屋清吉

